

IV章 各教科の取組

国語科 実践例

1 学期の思い出を手紙で伝えよう ～こんなことしたよ～ (第1学年)

1 目指す子供の姿

【互いに磨き合い、学び続ける子供の姿】

1 学期の思い出を手紙で伝えるために、出来事と言葉の関係を言葉の働きに着目して捉え、自分が一番伝えたい事柄を考える。その後、友達と交流する中で、伝えたい題材に必要な事柄を集め、その中から一番伝えたいことを再考して手紙を書く。このような活動を繰り返すことで手紙を書く活動に慣れ、文字で伝える楽しさを感じて、さらに相手や内容を変えて手紙を書いている。

知識・技能	学びに向かう力・人間性等	思考力・判断力・表現力等
仮名遣いや助詞、句読点の使い方を理解して、文や文章の中で使うことができる。また、共通、相違など情報と情報との関係について理解することができる。	文字で相手の思いを知ることや自分の思いを伝えることよさを感じるとともに、手紙を書くことで、互いの思いを伝え合おうとしている。	学校生活で経験したことのなかから伝えたいことを見付け、必要な事柄を集めたり確かめたりして、伝えたいことを明確にする。

本単元では、学校生活の中で家族に伝えたい出来事を見付け、2, 3文で構成された手紙で伝えるという言語活動を設定した。まず子供たちは、経験したことをどのような言葉で表せばよいのかを捉え、伝えたいと思った事柄について友達と語り合った。例えば生活科の勉強という同じ題材を選んだ子供どうしが交流した際に「僕は、朝顔の観察をしたことを書くよ。葉っぱがざらざらしていることを見付けてびっくりしたよ」「私は、朝顔の種まきをしたことを書くよ。朝顔に名前を付けたことが楽しかったよ」「なるほど。確かに朝顔に名前を付けた種まきは楽しかったな」などと自分の考えに新たな事柄が加わり、それに関するより詳しい様子を思い出していった。そして、題材に合う事柄の中で自分が一番伝えたいことを再考し、始めの考えに加筆修正して手紙を書いた。このような活動を繰り返して慣れていく中で、自分の伝えたい事柄を決めて手紙を書けるようになってきたと感じた子供たちは、自分の思いを文字で伝えることの楽しさを実感し、別の内容や別の相手への手紙を書きたいという思いから、また新たな手紙に挑戦しようという気持ちを高めていったのである。

2 子供の実態 (本単元に入るまで)

メタ認知に関する実態調査から、35名中14名は見直したり、確かめたりすることができていると考えられた。また、教科の特性に関する実態調査では、発言の共通点や相違点を捉えることが得意だと答えた子供12名のうち、7名は実際には十分には捉えられていなかった。学級全体として、友達と自分の考えを比較して共通点や相違点を捉えることに対して課題があると考えられた。さらに、書くことに関する知識・技能面においては、8名の子供が自分の理解度を正しくメタ認知できていないという結果が見られた。

3 メタ認知を促す働きかけ

(1) 課題解決中

友達との交流場面では、同じ題材を選んだ子供どうしを近くの席に配置したり、自分の選んだ題材を示した名札や、題材や事柄の項目を書く枠を色分けしたワークシートを用いることで、互いが選んだ題材や事柄の共通点や相違点を捉えやすくし、同じ項目に焦点化した話し合いができるようにした。自分

が一番伝えたいことについて一緒にその内容を詳しく思い出したり、互いに質問やアドバイスをし合ったりする中で、新たに加わった事柄についてはワークシートのウェビングマップに加筆しておき、交流後にそれを参考にしながら、改めて一番伝えたいことを決めていった。【きらきら紹介シート、きらきらタイム】(2, 3時間目)

また、知識・技能面については、これまでの学びとその理解度を一覧にしてまとめた「学びの足跡」の中から、『「、」「。」は右上に書く』や『助詞「は・へ・を」の使い方』などの本単元での書くことに関する項目を取り上げた。書いた手紙を友達どうして読み返し、それらの項目についてできているかどうかを互いに確認し合うことで、自分の手紙の内容について振り返った。【学びの足跡】(2, 3時間目)

(2) 課題解決後

課題解決後には、まず「きらきらレター(自分の一番伝えたいことを書く、正しい表記で書く)の下書きが書けたか」と、「友達と一緒に考えることができたか」という観点について◎○△の三段階で自己評価をさせた。子供たちの「できた」という思いを確認した後、本時の感想を問い、子供の発言に対してさらに問い返して具体を語らせたことで、できるようになったことや学び方のよさが表出された。できるようになったことに関しては、「学びの足跡」に記録している過去の自分と比較させて『前は「を」がうまく使えていなかったけど、今日は正しく使えた』などと自分の成長を語るができるようにした。【きらきら発見タイム】(2～4時間目)


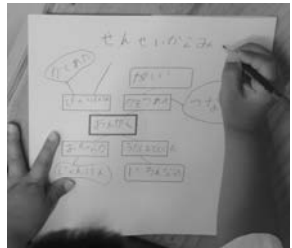
4 単元構成の工夫と学習の流れ(総時数 4時間)

単元の始めに、1学期の思い出を手紙で伝えたいという子供たちの思いを大切に、手紙を送る相手は、自由に決められるようにした。また、自分の伝えたいことが相手によく伝わる手紙にするために、手紙の題材や事柄を選ぶ際には何度も友達と交流する機会をとることで、その出来事について具体的に思い出し、その中から自分の一番伝えたいことを選べるように工夫した。

次	学習の流れ及び主な子供の意識
第一次	<p>① きらきらレターを書くための計画を立てよう</p> <p>手紙をもらったり書いたりした経験やその時の気持ちを振り返って、自分たちも手紙を書きたいという思いを高め、楽しかったことや頑張ったこと、嬉しかったこと等を手紙(きらきらレター)に書いて伝えようという単元の目標を設定した。そして、日々の写真を載せているこれまでの連絡帳や生活ファイル等を参考にしながら1学期を振り返り、誰にどんなことを伝えたいかを考える中で、みんなで話し合えばたくさんの題材や事柄が集まることを実感した。</p>
	<p>② きらきらレターの書き方を考えよう</p> <p>前時に見付けた題材の中から一つを取り上げ、みんなで一緒に手紙の書き方を考えていった。伝えたいことが相手によく伝わる手紙にするためには、「誰が・いつ・何をした」に、その時の詳しい様子を足して書けばよいという知識を得た後、その事柄についてより具体的に思い出すために、友達と話し合った。そしてそれを基に自分が一番伝えたいことを再考し、手順を確かめながら一緒に手紙を書いていったことで、きらきらレターを自分で書くことに対する自信を高めることができた。</p>
第二次	<p>③ 出来事を詳しく思い出して、きらきらレターを書こう (本時 3/4)</p> <p>伝えたい事柄とその時の詳しい様子について考え、自分の考えとの相違関係を捉えるという知識を基に、友達と事柄について振り返ったり質問やアドバイスをし合ったりした。こうして自分の考えを広げたり深めたりした後、手紙の内容を加筆修正して下書きをし、相手に伝わりやすい内容で正しく書けたかを他者から評価してもらい、書くことの技能の習熟度を確認し、きらきらレターの清書への自信を高めていった。</p>
	<p>④ きらきらレターを完成させよう</p> <p>前時に下書きした文章を清書し、きらきらレターを完成させた。前時までに表出されたもっと手紙を書きたいという子供たちの思いから、別の内容や別の相手を選んで、新たな手紙を書いていった。完成した手紙は、後に直接渡したり、学校から郵送するなどして、相手からの反応をもらうこともできた。</p>

5 本時における子供たちの姿（3/4時間、**支**：支援員）

本時は自分が一番伝えたい事柄について友達と交流する中で、題材に必要な事柄を集め、それらを基に自分が一番伝えたいことを再考し、正しい表記で手紙の下書きを書くことを目指した。

学習活動	授業の詳細と主な子供の意識
<p>課題設定以前 〈学習活動1〉 学習課題を確認する。</p>	<p>始めに、本単元では1学期の思い出をきらきらレター（一番伝えたいことを書く、正しい表記で書く）で伝えるという学習の目的を確認した。前時に、共通の題材を取り上げてきらきらレターの書き方を学んだ際に、子供たちは「みんなで考えれば、伝えたい出来事についてもっと詳しく思い出せる」ということを実感していたので、自分の伝えたい題材で書くきらきらレターについても「友達と一緒に考えたい」という思いをもっていった。そこで本時は、友達と交流し、伝えたい出来事を決めて、きらきらレターの下書きをするという学習課題を設定した。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> <p>出来事を詳しく思い出して、きらきらレターを書こう</p> </div>
<p>課題解決中 〈学習活動2〉 伝えたい事柄について、友達と話し合う。</p>	<p>決めた題材についてより詳しく思い出すために、自分が手紙に書こうとしている事柄（したこと、その時の詳しい様子）について友達と話し合った。題材を示した名札や、題材と事柄を書く枠を色分けしたワークシートを用いることで、自分の伝えたいことが友達と同じか違うかということに気付きやすくなった。（支考えの共通点や相違点を捉えにくい子供には、見比べるところを指し示して、見る場所を焦点化できるようにした。）そして事柄が友達と同じだった場合はその詳しい様子を共有し、異なっていた場合は新たに見つけた事柄で自分がいいなと思ったものをワークシートのウェビングマップに加筆した。【きらきら紹介シート、きらきらタイム】</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p style="text-align: center;">メタ認知を働かせている様相</p> <p>普段から自分を客観的に振り返ることができているC1は、まず友達に「何にしたの」と尋ねて選んだ題材が同じであることを確認した後、朝顔の栽培について話を始めた。友達との交流を通して、ウェビングマップに「お星さま」「大きい」という葉っぱの形や大きさ、「肥料」をあげた活動について付け足していた。</p> <p>また、日頃から積極的に友達に関わっていくことが得意ではないC2は、ワークシートを見せ合いながら友達と期末テストについて話をする中で、難しかったと感じたことが同じであることを捉えた。そして期末テストの中でも算数のことについて書きたいと、自分の考えをより具体化することができた。</p> </div> <div style="text-align: right;">   </div>
<p>〈学習活動3〉 「きらきらレター」の下書きを書く。</p>	<p>加筆したウェビングマップを見て、自分が一番伝えたいと思う事柄を再考し、ワークシートに書いた。きらきらレターの下書きをする際には、ワークシートの題材と事柄の項目が1文目（誰が・いつ・何をした）に対応し、その時の詳しい様子が2文目以降に対応していることを全体で確認し、全員が見通しをもって取り組めるようにした。（支活動に取り掛かりにくい子供には、ワークシートと下書き用紙の対応を直接指し示し、焦点化することで、活動に入れるようにした。）</p> <p>その後、「学びの足跡」から抽出した書き方の項目について、できているかを互いに確認し合った。できていたら赤丸、できていない場合は青丸で文章の横に印を付け</p>

てもらうことで、自分の理解度を視覚的に捉えられるようにした。【学びの足跡】

メタ認知を働かせている様相

ふだんはあまり自分を振り返ることをしないC3だが、友達が「学びの足跡」の項目（句読点の位置，助詞の使い方等）で、正誤を赤と青の丸で色分けして評価してくれたことで、自分のきらきらレターを見直して、修正すべき点に気付くことができた。C3は赤の丸をたくさんもらえたことに喜びを感じ、友達が書いた手紙を次は自分がチェックしようとする姿が見られた。



課題解決後
〈学習活動4〉
本時の学びを
振り返る。

振り返り際には、まず各自できらきらレターについて①一番伝えたいことを選べたか、②正しい表記で書けたか、③友達と一緒に考えることができたかの三つの観点について、3段階で自己評価させた。「できた」という喜びや満足感を表出させた後の交流では、以下のような対話が見られた。

メタ認知を働かせている様相

T：きらきらレターが書けた人がたくさんいますね。みんな、どうしてきらきらレターが書けたのですか。
C1：お友達に聞いたから、分かりました。
T：どんなことを教えてもらったのですか。
C1：生活の勉強で、お友達と朝顔の観察をした時のことを教えてもらいました。
T：C1さんは、最初は「朝顔の水やりをしました」と書いていたけれど、友達の話聞いて今日のきらきらレターでは「朝顔の葉っぱがお星様に見えました」に変えていましたね。
T：C4さんは、伝えたいことが二つあって迷っていましたね。友達とお話をして、どうでしたか。
C4：C5さんが詳しく教えてくれたから、ザリガニのことを書きたくなりました。
T：C5さんのおかげで、どちらにするか決まったのですね。友達と話をしたことで、みんなの手紙がきらきらになりましたね。

6 考察（○：成果，●：課題）

1学期の思い出を手紙で伝えるために、自分の一番伝えたい題材や事柄について友達と話し合う活動を通して、子供たちはより詳しい様子や新たな出来事を思い出して、改めて伝えたい内容を考えることができた。また、交流を通して他にも書きたい内容が見付かったり、きらきらレターを上手に書くことができたりしたことで、もっと手紙を書きたいという思いを大きくしていった。

- 題材や事柄ごとに枠を色分けしたワークシートを用いて、色ごとに対応させて交流の前後の考えを比較できるようにしたことで、子供たちは自分の考えの変容を捉えやすかった。
- 正しく書けたかどうかの確認は、項目を二つに絞っていたので、互いに言葉を掛け合いながらスムーズに評価することができた。友達の文章を評価する中で、自分の手紙の修正点に気付く子供もいた。
- 前時の終わりに「友達と一緒に考えると考えが広がる」という意識を表出させることができていたので、それを基に、子供たちは妥当性を感じながら本時の学習課題を設定することができた。
- 同じ題材を選んだ友達から交流することが徹底できていなかったり、交流の手順が共通理解できていなかったりしたことで、自分の選んだ題材について深める交流が十分にできなかった子供がいた。

